

[一般論文]

## 外国人集住地域における「フェスティバル」 から見える日本人住民と ブラジル人住民の「つながり」の醸成

渋谷 努

愛知県豊田市内に位置する保見団地では、毎年6月に「ほみにおいでん」が開催されている。2020年はコロナ禍のせいで開催できなかったが、開催されれば10回目となるはずだった。このフェスティバルは、日本的な要素だけでなくブラジルなどの多文化の要素が含まれている多文化フェスティバルである。保見団地へのブラジル人住民の入居が始まったのが1987年ごろと言われているので、祭りが始まった2011年はブラジル人住民の入居からおよそ20年が経ってからだった。本稿では、祭りやフェスティバルを通して保見団地におけるブラジル人住民受け入れ30年間の住民間の関係の変容について考察する。

これまで日本で行われてきた祭礼研究によると、伝統的な祭りは「ハレ」の非日常的な時間・空間であり、「ケ」である日常生活の社会統合を強化すると考えられてきた(松平 1990)。また本稿で取り上げるような、宗教的な意味合いがない、または非常に薄いフェスティバル(まつり)は、社会凝集力や町おこしのエージェントとして再評価されている。さらにフェスティバル(まつり)は、欧米社会などではインナーシティに多文化の色合い、文化的多様性を内包する場合があると指摘されている(Frost 2016: 569)。フェスティバルを学際的に研究しているゲッツはフェスティバル研究の核となる現象は、フェスティバル経験とフェスティバルに付与

された意味であると論じた。人々はそれぞれの目的のためにフェスティバルを創出し、フェスティバルの経験は参加者ばかりではなく主催者、運営者側にも意味を与えている (Getz 2010 : 19)。つまりフェスティバルは個人の経験を超えて社会や文化の中で重層的な意味を持っており、これらの経験に基づいた意味を明らかにすることがフェスティバル研究の主目的となる。

日本で行われてきた祭りやフェスティバルの研究において、本稿と関連する問題意識でいえば、祭りの担い手である地域社会の変化が祭りのあり方に与えた影響が論じられている。例えば、和崎は京都で行われる大文字祭礼を対象に研究した。祭祀を担っている地区は、第二次世界大戦後の経済発展と都市圏が拡大したことにより、新住民が来るようになった。これまでと異なる高学歴層や高収入層が現れたことで、旧住民は元々自分たちが行ってきた伝統的な行事の価値を再発見した。そこで和崎は自分たちの伝統の価値を再発見するには他者の存在が必要であり、伝統を再発見し活性化するためには、他者を包摂していくことが可能な解放性が都市の祭礼には必要であることを指摘した (和崎 1996)。

有末は東京の佃・月島で行われている佃祭りを研究した。当該地域は旧住民の人口減少が生じており、さらにこの地区の再開発により、高額所得者層が新しく住むようになった。1990年に伝統行事が復活したが、その復活の過程を調査すると、伝統的な行事の担い手が行事の形式を柔軟に現状に対応させ、新住民はそれに参加していく可能性を示唆している (有末 1999)。つまり、日本で行われた祭りや祝祭研究の中では、旧住民と新住民との間で旧住民が伝統的な行事を変化させながら新住民を巻き込んでいることが明らかにされている。

それに対し本稿では、新住民としてのブラジル人住民が関わる祭りやフェスティバルを取り上げ、その開催過程に注目していく。これまでこのような多文化に関するフェスティバルなどは3Fとして批判されることが多い。

竹沢は、日本の多文化共生では、多文化が3F「衣 fashion」「食 food」「祭 festival」に還元されがちである点を指摘している。続けて、このような3Fを積極的に打ち出すフェスティバルを多文化共生の啓発事業と位置付けるなら、幅広い層の日本人住民の理解を深める上で、ある一定の役割を果たしてきたと一定の評価をしながらも、これらの華やかな側面に光が当たるなか、構造的差別や偏見等が影となり覆い隠されて、さらにそれらの文化が単なる消費の対象とされたり、政治的に利用されることもあると批判している（竹沢 2011：5）。

このような構造的な差別を隠してしまう面が祭りやフェスティバルにあることは否定できない。しかし、祭りやフェスティバルを行うことがポジティブな意義を持つことが指摘されている。例えば、大阪での在日コリアンによる生野民族文化祭やワンコリアフェスティバル、四天王寺ワッセを扱った飯田の研究がある。飯田はその研究で、宗教ではなく民族性がフェスティバルのシンボルとして扱われ、ポジティブに表出されていることを明らかにしている（飯田 2002）。また、戴は同じくワンコリアフェスティバルや八尾国際交流野遊祭を対象とし、祭り・フェスティバルにおける多文化共生への教育的側面や多文化の現状を知らしめる意義がある点を指摘している（戴 2006）。

しかしこれまでの多文化フェスティバルに関する研究は、祭りやフェスティバルを共時的に捉えている。それに対して、本稿では豊田市保見団地における祭りやフェスティバルに焦点を当てて、本格的に団地内でブラジル人住民が居住を始めた1990年代ごろからの30年間における変化について考察を加える。日本人住民とブラジル人住民との間の関係の変化を背景に、フェスティバルの担い手の変化、特にブラジル人住民のフェスティバルへの関わり方の変化を、いわば住民間の関係を表す鏡としてフェスティバルを捉え、そこから住民間の関係について明らかにする。

本稿で用いるデータは2013年から祭りなどにスタッフとして学生とと

もに参加し、祭りの準備段階、当日、反省会などにも参加した。さらに保見団地内で外国人支援や地域活性化を行なっている NPO にも学生とともに参加し、そこでの参与観察やインタビューによって情報を得た。さらに 2016 年に名古屋大学社会学研究室と協力し質問紙調査を実施し、その結果も反映している。また、2016 年時点との比較の参照として、1997 年に豊田国際交流協会および各自治区が中心になって、ブラジル人住民の生活実態について行った調査の結果についても触れていく。

### 保見団地のブラジル人住民受け入れのプロセスと祭りの概要

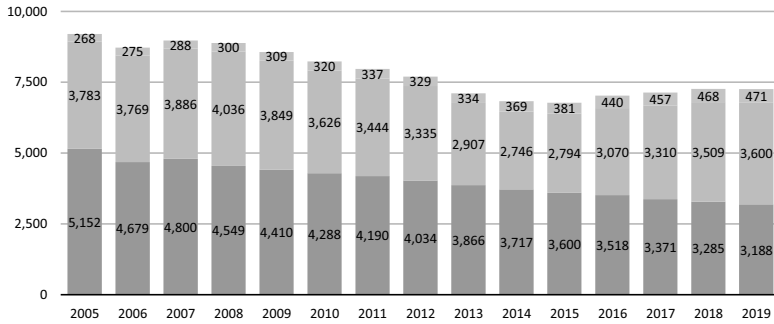
保見団地は愛知県豊田市の北西部に位置している。この団地は県営住宅、UR（都市再生機構）、一戸建てから構成されている。さらに町内会組織としては公団保見ヶ丘、保見ヶ丘六区、県営保見、保見緑苑の 4 つの自治区に分かれている。またこの団地は 1978 年から入居が開始したが、当初から空き部屋が目立ち、「幽霊団地」と噂されることもあったという。

まず 2020 年 5 月 1 日現在で豊田市内に住む外国籍住民の数について見ていく。豊田市内では 1 番多い外国籍住民はブラジル人住民で 6600 人、2 番目が中国で 2600 人、ベトナムが 2500 人で 3 番目、フィリピンが 2000 人で 4 番目となっている。

それでは豊田市内の中ではどの地区に外国籍住民が多いのだろうか。豊田市内の中では保見地区に 4000 人以上の外国籍住民が住んでいる。ブラジル人住民だけを考えてみても 3600 人以上のブラジル人住民が保見団地の中に住んでいる。この数は豊田市内に住むブラジル人住民のほぼ半数に当たる。ここからもこの地区が豊田市内の中でも突出してブラジル人住民が集中している地区であることがわかる。

保見地区での日本人住民及び外国籍住民の推移について見ていこう。表 1 を見ると、保見地区は 2005 年で総人口が 9000 人以上いたのに対して、2019 年になるとその人口は 7200 人程度にまで減少している。この 15 年

表1 外国人データ集（令和元年12月1日現在）



出所：豊田市外国人データ集 (<https://www.city.toyota.aichi.jp/shisei/tokei/sonohoka/1004767.html>) に基づき筆者作成

で1800人近い人が減少していることになる。その減少の多くは日本人住民の減少によるものと考えられる。2005年に5000人ほどいた日本人住民が2019年になると3100人程度まで減少している。つまり2000人の日本人住民が減少しているということになる。それに対してブラジル人住民を見ていくと2008年に4000人だったものが徐々に減少していき、2014年には約2700人まで減少した。しかしその後ブラジル人住民は増えていき2016年から3000人を突破し、2019年には3600人に達している。そしてこのブラジル人住民の総人口における比率は2005年で41%だったのが2018年になると50%を超え、日本人住民よりもブラジル人住民の方が多い地区になっている。

保見団地内での外国籍住民の中でのブラジル人住民に関していうと、細かく見ていけば2009年に92%だったものが徐々に徐々に減少していき2018年に87%にまで下がる。その後も外国籍住民の中でブラジル人住民の占める割合はわずかに増えて現在88%になっている。このようにブラジル人住民の占める割合が減少したのは、少しずつではあるがブラジル以外の外国籍住民が保見団地内に居住するようになってきているからと考え

ることができる<sup>2</sup>。

次に保見地区で行われている祭りやフェスティバルの概略について紹介しよう。保見地区では、夏祭り、草餅祭り、ふれあい祭り、どんと祭といった祭りが年中行事として行われている。主催団体を見ると、夏祭りは4自治区で、毎年当番制となっており、担当自治会が祭りの準備や運営を行っている。さらに祭りにあたっては、各自治区の区長が挨拶することからも、4自治区合同の祭りであることがわかる。実行委員会が、各自治区から10名ずつ選出された役員で構成されており、運営は実行委員会の人々の手で行われている。その選出方法は、自治区ごとに異なるが、経験者がいないと祭りがまわっていかない、あるいはやり手がないということもあり、長年実行委員をしている人もいる。屋台の売り子やごみステーションの管理など、きちんとした役割分担がなされており、毎年積み上げてきたものを引き継ぐ形で行われている。

それに対して、草餅祭りは六区、ふれあい祭りは公団、どんと祭は県営といった各自治区が主催しており、運営している。そこで、自治会役員になった経験があるものは各祭りの運営側として参加した経験がある。各祭りは、それぞれの自治区内で運営されており、挨拶も当該区長が行うのみである。

#### 1990年～2008年までの保見団地でのフェスティバルとブラジル人住民

保見団地におけるブラジル人住民との歴史は、1987年ごろにまで遡る。そこから1990年11月ころまでを、当時保見団地を調査していた都築は問題噴出期としている。保見団地へのブラジル人の入居が始まった1987年は1990年の入管法改正以前であり、自治体や企業も外国人との「共生」に関して何ら準備をしていない段階だった。さらに地域住民からすると事前に何らブラジル人住民が住むことを知らされることなく、いわばある朝突然、隣からポルトガル語が聞こえるという状況が生じた。このように何

の準備もない段階でブラジル人住民が集住し始めた保見団地では、日本人住民とブラジル人住民とのあいだで様々なコンフリクトが生じた。典型的な例としてゴミ問題、騒音の問題がある。騒音問題は週末の金曜日の夜からパーティーが行われ、夜中まで続くことで周りの住民からのクレームが来たことである。これは出身国のブラジルで行われていた週末のパーティーを日本でそのままやってしまったことから起きた問題である<sup>3</sup>（都築 1995：243-247）。

その後都築は、1990年12月から1992年11月頃までを「緊張をはらんだ鎮静」の時期と呼んでいる。ブラジル人住民も保見団地に住み始めて数年がたち、彼らも団地の居住マナーを一応身につけ、「問題」はおさまった。この頃来ていたブラジル人住民の多くは日本語を話すことができないもしくは片言の日本語しか話せない人が多かった。そのためブラジル人住民と日本人住民との間でのコミュニケーションがうまくいかず、国籍を超えた友人はなかなか生じなかった。またブラジル人住民はブローカーを通して保見団地に居住するようになっていた。そこで都市基盤整備公団（当時、現UR）の賃貸を借りて居住している人たちが多かった。しかしこの頃になるとブラジル人住民とブローカーとの契約が切れ、ブラジル人住民の中には家賃の高い公団住宅ではなく、家賃の安い県営住宅へ移動する者が現れ、県営住宅でも公団と同様の「問題」が起り始めた（都築 1995：247-248）。

その後、都築による「共生」の時期は1992年12月頃～1995年11月頃であり、これまでと比較して、一定の秩序ある生活が緊張感なく成立する状態になった時期である。団地全体に穏やかな空気がみなぎり、区長の口から「日系人の人たちに対して、特別な配慮は何もしなくても良くなったし、違和感もない」という言葉がでるほど、双方とも落ち着いた生活を営むようになった（都築 1995：248-250）。1992年の夏祭りでは、当番の自治区の区長がブラジル人住民にも参加させたいということで、日本語教室

関係者に呼びかけ、ブラジル人住民も出店して商品を買った。ブラジル人が集まり二日間でブラジル風焼き肉のシュハスコが900本、ビール、ホットドッグが完売した。ブラジル人住民は日本人住民に見下されていると感じていたが、日本人住民が列をなして買っていったということで自信を持った、と区長は語っている。続けて区長は、ブラジル人住民側の問題点として、ブラジル人住民の間できちんとした組織化がされておらず、口伝えによってのみ情報伝達がされていることをあげている(都築 1993: 122-123)。

それ以降の保見団地でのブラジル人住民とフェスティバルに関わる経緯を中日新聞の記事から辿っていく。1998年になると、団地内のブラジル人住民による団体が結成される。それ以前にブラジル人住民によるゴミ出しや騒音などに関して日本人住民からクレームが出ており、ブラジル人住民の生活マナーが問題視されていた。その中で在日ブラジル人住民向け新聞の記者の男性が代表となり、ブラジル人住民による住民組織、「保見団地ブラジル人協会」を結成した(中日新聞 1998年5月24日)。その後の活動として報道されているのは、同年6月に団地のそばにある高校で「ふれ愛ときめき春祭り・豊田北」というフェスティバルが行われ、そこに「保見団地ブラジル人協会」も運営に協力した。そのフェスティバルにはブラジル料理が振るまわれるとともにスポーツも行われ、日本人住民との交流の機会となった。またフェスティバルのフィナーレでは豊田市のおいでん踊りとともにサンパの共演が予定されていると報じられている(中日新聞 1998年6月7日)。またサンパチームを結成するのにも、この団体は関わっていた。同年10月4日に行われる予定の国際交流フェスティバルでの初舞台に向けて、サンパチームは日本人住民、ブラジル人住民、ペルー人、ベネズエラ人で構成されており、踊り手とパーカッションなどの打楽器演奏者から構成されている(中日新聞 1998年9月30日)。この記事以降、「保見団地ブラジル人協会」に関する新聞記事を見出すことはできなかった<sup>4</sup>。



翌年の1999年になると右翼団体とブラジル人住民の若者たちとの対立事件が新聞やテレビなどのメディアで報道され、2000年にも暴走族との対立が大きく報道された。さらに、それ以前から問題になっていたブラジル人住民の生活マナーの問題もあり、2002～2003年まで保見団地の問題が報じられることが多かった。そのような状況の中で、日本人住民とブラジル人住民との交流の機会としてのフェスティバルが企画されていった。

保見地区での地域住民の交流を意図した「保見ふれあい祭り」が豊田市内にあるコミュニティ会議の一つである保見コミュニティ会議の主催で行われるようになった。このフェスティバルは現在でも11月に行われている（中日新聞 2000年10月30日）。

2000年12月10日には、保見地区4自治区により「2000年記念保見ヶ丘もちつき大会」が開催された。午前8時から240キロ分の餅をつき、集まった多くの団地住民に振る舞っている（中日新聞 2000年12月12日）。2002年には、団地を管理している都市基盤整備公団中部支社が発案し、カラフルなタイルを用いて案内板をブラジル人学校の生徒や日本語教室の子どもたちが作った。その出来上がりを見て「団地への愛着が深くなった」という声が報じられている（中日新聞 2002年5月15日）。さらに同年の8月には、27回目の夏祭りに日本人住民やブラジル人住民が多く参加し、焼肉や飲みものを出す屋台が出店された（中日新聞 1998年8月11日）。この時期では上記のように自治会や都市基盤整備公団のような公的な機関がフェスティバルを企画し運営していた。最後に取り上げた夏祭りに関する記事から、1992年以降もブラジル人住民がシュハスコなどのブラジル風焼肉を販売することがあり、ブラジル人住民も夏祭りの運営に協働して参加していたことがわかる。

しかし、それだけではなくNPOやPTAなどの市民セクターが主となってフェスティバルを開催するようになった。2001年6月には、1999年に結成された団地住民が主たるメンバーでブラジル人住民への支援とともに

団地の地域活性化のための活動を行っている「保見ヶ丘国際交流センター」が、ブラジルで伝統的に行われてきた「フェスタ・ジュニーナ」を開催した。この祭りはポルトガル語で「6月の祭り」を意味し、会場では軽快な音楽とともに踊りを楽しんだ。さらにシュハスコなどのブラジル料理も楽しめるように飲食コーナーも設けられた。また「カポエイラ」のサークル活動を行っている団体が、カポエイラを披露している（中日新聞 2001年6月5日）。

同年6月26日には、西保見小学校のPTA文化部が子供たちだけではなく国籍の異なる親同士での理解を深めるために「ブラジルの家庭料理を作る会」を開催した。母親を中心に22人が参加し、ブラジル人住民の母親から、じゃがいも、小麦、卵を使った料理やサラダなどの作り方を学んだ（中日新聞 2001年6月27日）。このようなフェスティバルを市民セクターが開催していったことは、日本人住民とブラジル人住民との間でつながりを形成するきっかけになり、フェスティバルを運営するノウハウも実際に運営することから学ぶことができたと考えることができる。さらにこのような機会を通して、日本人住民とブラジル人住民との間での協働の機会となっていたと推測することができる。

しかしこの時期のフェスティバルでは、ブラジル人住民は、日本人住民側の自治区や公団などの団体や、「保見ヶ丘国際交流センター」のようなNPOが主催するフェスティバルにゲストで参加し、料理やサンバなどブラジルのなものを提供するのに留まり、自分たちが主体となることはなかった。

1997年におけるブラジル人住民及び日本人住民との間でのネットワーク

1997年に豊田国際交流協会および各自治区が中心になって、ブラジル人住民の生活実態についてアンケート調査を行った（豊田市国際交流協会他 1997）。その調査の結果からわかる、当時の住民間の関係及び祭りへの

参加実態について見ていこう。ブラジル人住民同士の間人間関係を見てみると、全く付き合いがない6.5%、挨拶するぐらいの付き合い59.3%、話をしたり家に呼び合う付き合い29.6%、相談をしあうような付き合い4.6%となっていた。ここから、当時のブラジル人住民間の関係は、挨拶するぐらいの表面的な関係を持っている場合が6割で最も多く、それについて家に呼び合ったり相談したりするより親密な関係を持っている人は3割程度だったことがわかる。このようにブラジル人住民間でもそれほど親密な関係が築かれていないことは、どのような関係をブラジル人住民と持ちたいかという問いに対して、家に呼びあったり、相談し合うような付き合いを求めている人が48%と現状よりもより親しいブラジル人住民の友人を持つことを望んでいる人が半数に近いことからわかる。

次に日本人住民との関係を見ていこう。日本人住民との交流についてみていくと、全く付き合いがない18.5%、挨拶するぐらいの付き合い71.8%、話をしたり、家に呼び合う付き合い5.6%、相談をしあうような付き合い4%となった。全く日本人住民との付き合いがない場合が2割程度、挨拶するぐらいの表面的な関係が7割程度になり、合わせると日本人住民との関係は全くないか表面的に止まる場合が9割に達していた（豊田市国際交流協会他 1997）。

日本人住民との関係に関して望ましいものを聞いても、できるだけ付き合い合わない8.3%、挨拶するぐらいの付き合い80%、話をしたり、家に呼び合う付き合い6.7%、相談をしあうような付き合い5%となり、この場合でも表面的な付き合いで十分と考えているものが9割に及んでいる。さらに日本人住民と交流する機会があるかという問いに対しては、あると回答したのが半分で、半分近くの人には日本人住民と交流する機会を持っていなかった。団地への満足度に関する質問項目でも、近隣の人々との人間関係に関しては、大変満足38.6%、ほぼ満足35.4%、やや不満14.2%、大変不満11.8%と満足している人が7割となっている。ここで指している近

隣との関係には日本人住民との関係も含まれているため、当時のブラジル人住民は日本人住民の関係を表面的なもので十分に満足していたと考えることができる。以上のことから、当時保見団地に住んでいたブラジル人住民はそれほど日本人住民との関係を形成しようとは考えていない一方、ブラジル人住民とはより親密な関係を求めているも、そこまでのネットワークが形成されていない状況だったことがわかる（豊田市国際交流協会他1997）。

1990年代後半での保見団地におけるブラジル人住民と日本人住民との関係をまとめていこう。ブラジル人住民と日本人住民との間では、そこまでの友好関係はまだ形成されておらず、またブラジル人住民側も日本人住民と積極的に関係を持つとは考えていなかったことがわかる。これらのことから保見団地という地理的な中で日本人住民とブラジル人住民とはそれぞれがコミュニティを形成し、コミュニティ間の関係がそれほど行われていない状態だったと言える。そしてそのような平行社会の中でブラジル人住民の定住化が進んでいることから、梶田などが呼ぶ「顔の見えない定住化」が起きていたと考えることができる（梶田他2005）。

ブラジル人住民にとっての夏祭りへの参加について見ていくと、参加したことがあると答えたのが33%だった。各地区で行われている祭りへの参加が4~17%と非常に少ないのと比べれば高いが、多くが参加しているとは言えない。それでは、彼らがいかなかった理由として挙げているのは、祭り自体に興味がないと答えたものは少なく14%だった。それに対して、仕事の理由などで忙しく行けなかった答えた場合が30%であり、さらに祭りを知らなかったと答えたのが56%と半数以上だった。このことから、自治会の行事に関するポルトガル語での情報伝達がそこまで機能していなかった可能性を窺わせる。また、夏祭りのでやりたいことの自由記述欄の中には、「子供のグループを集めてサンバやフレヴォ（ブラジル東北地方の有名な踊り）を踊りたいといった、自分たちの文化の報告の場にしたいと

考えるものがいれば、「日本の踊りを覚えたい」といった日本文化を受容することを望む声もあった。さらに「外国人が日本の文化とふれあい、日本人住民がブラジル・西洋の文化とふれあうことができればいい」と、祭りが異文化交流の機会となることを望む者いた（豊田市国際交流協会他1997）。

ブラジル人住民の定住化が試み始めていたとはいえ、日本人住民とのコミュニケーションはまだ少なく、友人関係のようなつながりもまだ薄いものにとどまっていた。地区の夏祭りに関する情報ですらそれほどブラジル人住民の間には浸透していなかったことがわかる。しかし祭りやフェスティバルという機会が日本人住民にとってはブラジル文化、ブラジル人住民にとっては日本文化のような、異文化と接する機会であるとともに、自分かを提示する機会であるそれを望んでいるものがあることは確認できる。

#### リーマンショックとフェスティバル：2008年以降

次に中日新聞で保見団地が報道されることが増えるのは、2008年にアメリカで起きた経済不況によって日本にも経済的に大きな影響を与えたリーマンショックである。それにより、非正規雇用や派遣社員であったブラジル人住民が仕事を失った。また彼らの中には失職とともに居住地を失うものも多く、県営保見団地に臨時に住まわせることも行われた。

そのような不況でブラジル人住民が失業で明日の生活も不安定な中で、保見団地の中でブラジル人住民による自助団体が結成された。失業保険の受け方や生活保護の申請の受け方など失業しているブラジル人住民たちの要望を集約して行政に伝えることを目的とした「保見ヶ丘ブラジル人協会」である。会の代表であるブラジル生まれの日系二世であるM氏は、以前から団地内でサンバチームを結成していた5人が中心となって、団地内のブラジル人住民への連帯を呼びかけた（中日新聞 2009年2月1日）。結成後、以前からブラジル人住民のゴミ出しマナーの悪さが指摘されていた

ことから、「保見ヶ丘ブラジル人協会」は粗大ゴミが出されていることが多い場所で、マットレスやソファー、タンスなどを収集し、ゴミ分別をした上で回収した(中日新聞 2009年3月3日)。

日本人住民からの理解を得る行動をしつつ、「保見ヶ丘ブラジル人協会」は2009年5月に最初の「国際フェスタ」を開催した。料理や菓子、ビールをうる屋台が出店し、カポエイラやサンバ、和太鼓の演奏も行われ200人程度が集まった。このフェスタは、日本人住民ではなくブラジル人住民が始めたフェスティバルであり、それは保見団地では初めての試みだった(中日新聞 2009年5月18日)

さらに2011年になると6月25日に「ほみにおいでん」が開催された。これは豊田おいでん祭りの一環で行われるマイタウンおいでんの一つであり、おいでん踊りが踊られると共にブラジル料理の屋台がでラテン音楽のステージで盛り上がりサンバチームも出場していることが報じられている(中日新聞 2011年6月26日)

このように、リーマンショックによる失業者がブラジル人住民の中で増え、その支援活動を目的とした「ブラジル人協会」が結成され、いわばフェスティバルを運営することができる組織が揃い、また後で論じるように日本人住民との協働による運営が可能になったことにより、ブラジル人住民も関わりやすい祭り、フェスティバルが継続的に運営されるようになっていく。

## 2016年における住民間のネットワークの変容

このようなブラジル人住民と日本人住民との関係の変容について、2016年に名古屋大学社会学研究室と協力し質問紙調査の結果から確認しておこう<sup>5</sup>。

表2では、ブラジル人住民同士の関係が居住年数とどのような関係があるかを示している。表によると、保見団地での居住年数が伸びると、居住

地または職場にいる友人の数は増えていっている。またお茶や食事を楽しむブラジル人の友人の数も増えていっているのがわかる。

それではブラジル人同士ではどのような関係を持つ人がいるのだろうか。1997年では挨拶をする程度の人が60%に近かったが、表3によると2016年では挨拶をする、外で立ち話をする程度の人が17%にとどまり、それ

表2 ブラジル人住民同士のつながり

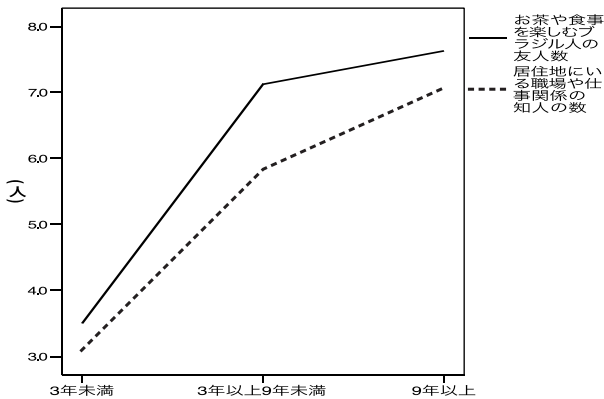
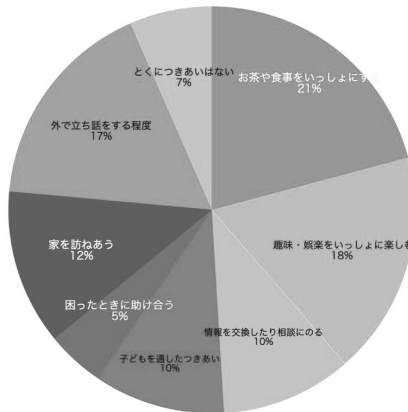


表3 ブラジル人住民同士のつながり関係別



よりも親密な関係を持っていると考えることができる、お茶や食事をともにする、趣味娯楽をともに楽しむ、家を足すねあうと答えた人は、合わせると51%と半数に近い人がより親密な関係をブラジル人同士で持つようになっている。

次にブラジル人住民と日本人住民との関係について見ていこう。表4から保見団地でのブラジル人住民たちは、居住地域である保見団地内に日本人の友人がいないと答えたものは60%に近い。しかし、4人以上いると答えたのは30%を超えている。1997年には日本人の友人がいると答えたのが10%程度と比べると、日本人に友人がいると答えたものは4倍以上になっていることがわかる。さらに、4人以上の日本人の友人がいると答えた人は30%を超えていることから、友人関係を持つ場合には複数の日本人の友人がいることがわかる。このように2016年のアンケート結果を、1997年と比べると、ブラジル人住民同士の関係がより親密になっていることがわかる。しかしそれによって、保見団地の中でブラジル人住民同士で固まり、日本人住民とのつながりがなくなるのではなく、国籍を超えたつながりが形成されていることがわかる（名古屋大学社会学研究室 2016：89）。

このように1990年代に行われた調査で見られた「顔の見えない定住化」

表4 ブラジル人住民と日本人住民との関係

	いない	1人	2~3人	4人以上いる
a) 職場関係に	37.6% (N = 35)	15.1% (N = 14)	14.0% (N = 13)	33.3% (N = 31)
b) 住んでいる地域に	59.1% (N = 55)	7.5% (N = 7)	11.8% (N = 11)	21.5% (N = 20)
c) 親族関係で	66.7% (N = 62)	9.7% (N = 9)	7.5% (N = 7)	16.1% (N = 15)
d) インターネット上で	77.4% (N = 72)	3.2% (N = 3)	7.5% (N = 7)	11.8% (N = 11)



から、日本人住民とブラジル人住民との間ではつながりが形成されつつあり、その親密度も強まっていることがわかる。

### 「国際フェスタ」と「ほみにおいでん」の始まり

以下では、保見団地で「国際フェスタ」とブラジル人住民が中心的な役割を果たしている「保見ヶ丘ブラジル人協会」が主催した「ほみにおいでん」がどのようなフェスティバルであるのかを概略していく。

「国際フェスタ」を企画した動機を「保見ヶ丘ブラジル人協会」のM氏は、リーマンショックで困っている仲間たちが心から楽しめる場所を作りたいからだと知っている<sup>6</sup>。地域の夏祭りは、あまりにも「日本的」であり、自分たちブラジル人住民にとっては楽しみきれない。そこで新たなフェスティバルを企画することを考えたという。さらにブラジル人住民のみを対象にするのではなく、それ以外の国出身者も対象にした多文化フェスタにした理由を聞くと、ブラジル人住民のためだけのものにはしたくなかったという。それは彼の職場にはブラジル人住民もいたがペルー人やフィリピン人もいた。さらに彼は豊田市からの依頼で仕事を行っており、そこで知り合った中国人などの状況を聞いても、自分たちブラジル人住民と同じように大変だった。それならば、みんなで楽しめるフェスティバルをしたいと思って、知り合いに参加や協力を求めたと語った。

実際に開催すると決めると、準備段階で日本人住民の協力が必要だった。M氏が協力を求めたのはA氏だった。M氏とA氏は、地域内で非行防止や治安のためのパトロールに参加することから知り合っていた。A氏は都市基盤整備公団と交渉し、会場である広場の使用許可を都市整備公団から取り、機材を手配した。また飲食の屋台を出すにあたって、露天営業の許可を取るための手続きや申請のやり方もA氏を通して情報を得た。

次に「ほみにおいでん」の始まりの経緯をみてみよう。「ほみにおいでん」の始まりは、「マイタウンおいでん連絡協議会」からの依頼がきっかけ

けだった。連絡協議会会長の S 氏は 2000 年代中頃から、保見団地内で不  
就学の外国人児童に対する支援を主に行ってきた NPO 団地でボランティ  
アをしていた。また、保見団地行われていた外国人問題を話し合う会合で  
ブラジル出身の M 氏と会っていた。その繋がりもあり、S 氏は 2009 年に  
先述の第 1 回「国際フェスタ」に参加した。彼はおいでんまつりに参加し  
ている大学生とともに舞台上上がり、おいでん踊りを踊りその場を盛り上  
げるとともに、おいでん祭りの PR も行った。「国際フェスタ」の運営の  
あり方を見て、保見団地に多く住んでいるブラジル人住民を中心としたマ  
イタウンおいでんの運営も可能と判断した S 氏は、M 氏に保見地区での  
マイタウンおいでんの開催を提案した。

提案を受けた M 氏は、「保見ヶ丘ブラジル人協会」が単独でマイタウン  
おいでんを行うのは困難と判断し、「国際フェスタ」を開催するときにも  
場所の使用許可や備品のレンタルなどの手続きを手伝ってもらった A 氏  
に相談した。

A 氏は、自治会の意向を聞かずに「マイタウンおいでん」を開催する  
ことはできないと判断し、4 自治区の区長と相談した。区長らの反応は、  
役員の負担が増えることを懸念し消極的な返答だった。M 氏は自治会か  
らの協力が得られなかったため、開催の依頼を断った。しかしその後も、  
S 氏から M 氏へおいでんを開催してみないか、と誘われた。M 氏は A 氏  
と相談をし、自治会に対しては役員に手伝ってもらう必要のない形で開催  
することで了承を得て、開催に踏み切った (渋谷 2020 : 222-223)。

このように「国際フェスタ」では、ブラジル人住民である M 氏の発案  
で、「ほみにおいでん」では、実行委員会から M 氏に声がかけられ、保見  
らしいフェスティバルの開催を依頼されている。このように M 氏の発案  
であれ、M 氏が持つブラジル人ならではのネットワークやアイデアを  
狙ったフェスティバルの企画であったとしても、M 氏や「ブラジル人協  
会」だけでは日本の地域社会の中で開催することは、手続きに関する知識

及び地域社会での了解の獲得の仕方などに問題が生じていた。そこでこれらのイベントが開催できたのは、M氏とA氏の関係が典型的に示すような日本人住民とブラジル人住民とのつながりが形成され、両者の間で協力関係が可能となったことが大きい。また「保見ヶ丘ブラジル人協会」のようなブラジル人住民同士の関係を組織化することができる団体ができたことが大きな要因と考えることができる。

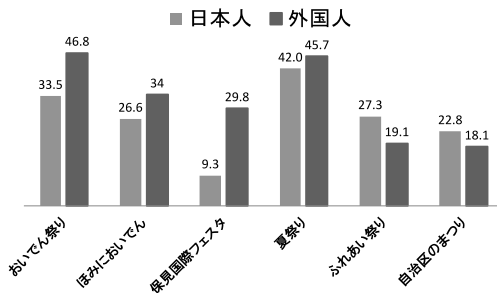
### 出会いと協働の機会としてのフェスティバル

日本人住民とブラジル人住民との関係の変化は、フェスティバルを運営、実践する中にも見出せるようになってきている。まず、2016年に行ったアンケート結果からブラジル人住民の保見団地内で行われる祭りやフェスティバルへの参加について見ていこう。

表5は、各祭りについて過去に観客として参加したことがある人の割合である。表におけるおいでん祭りは、豊田市街地で行われるおいでんファイナルである。この祭りには日本人住民で30%程度、ブラジル人住民では半数近くの人々が、参加経験があると回答している。回数を重ねているおいでんファイナルよりは、「ほみにおいでん」も「国際フェスタ」もま

表5 祭りへの参加（観客）

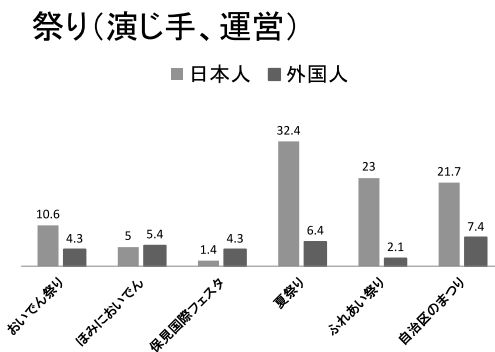
### 祭り（観客として楽しんだ）



だ参加経験率が低いが、半数前後の住民に参加経験がある。またこれらのフェスティバルに関しては他のお祭りに比べブラジル人住民の参加率が相対的に高い。要因の一つとしては、司会進行がほぼポルトガル語でも行なわれていることなどによって、外から見た際にブラジル人住民向けのお祭りに見えるような雰囲気があるからと考えられる。夏祭りは、保見団地ができてまもなく開催されるようになった盆踊りに相当するお祭りである。自治区が主体となって行っていることもあり、住民の参加経験は日本人住民で74.4%、ブラジル人住民でも51.6%と多くの方が、観客を含め何らかの形で参加したことがあると回答している（名古屋大学社会学研究室2016年）。

次に、祭りに演じ手や運営に関わった人の割合についてみていく。表6でおいでん祭りは、先と同じ市街地で行われるおいでんファイナルであり、これには踊り連として参加していることが想定できる。「ほみにおいでん」への参加には踊り連として参加したのも含まれるが運営や屋台での参加が想定され、「国際フェスタ」の場合は屋台やフェスティバルの運営に関わったものと考えられる。「ほみにおいでん」や「国際フェスタ」には、日本人住民よりもブラジル人住民が関わっており、それだけブラジル人住

表6 祭りへの参加（演じ手・運営）



民向けの祭りともみなされており、またブラジル人住民にとっても、先のM氏の開催意図のように彼らが楽しむためのイベントであることがわかる。

夏祭りやふれあい祭りを見ると、日本人住民の運営などでの参加が多いことがわかる。これは、これら自治区が主体となって行う祭りの場合、自治区の役員になったものは祭りの運営に加わらなければいけないからである。その中で注目したいのはブラジル人住民の中にも夏祭りなどの自治区の祭りに関わっているものが多いことである。

祭りを実際に運営する実行委員会常連の中にはブラジル人住民が4~5名含まれるようになってきている。そこには、実行委員会を10年以上やっているブラジル人住民もあり、彼がいないと祭りの開催ができないと言われている、祭り開催のノウハウを習得した者もいる。さらに、ブラジル人住民と地域社会との関係はさらに進んでおり、区長、副区長以外の自治区役員になるブラジル人住民も現れている。この背景には、日本人住民の高齢化により日本人住民側になり手がいないという側面もあり、より若い世代が多いブラジル人住民が自治会という地域行政に参加することが増えている。このように、祭りを開催するだけでなく自治会の運営にも関わり日本人住民とともに活動を行う機会を持つブラジル人住民が増えてきている。前節で論じたようにブラジル人住民の中では日本人の友人を持つものが増えてきているが、地域社会との関わりはそれだけではなく、自治区の活動にも関わるものが増えており、また日本人住民からも頼りにされる存在になりつつあることがわかる。

97年にはブラジル人住民の参加者が少なかった地域の祭りであるが、「ほみにおいでん」などの祭り際にはブラジル人住民は参加者として関わるだけでなく運営する側や屋台を出店する者も増えてきている。

「ほみにおいでん」の初回からシュハスコなどのブラジル料理を出店し、夏祭りには2010年ごろから毎回出店しているブラジル人住民のT氏は、

ブラジルにいたときはレストランで調理師をしていた<sup>7</sup>。その後日本に1998年に来日してからは工場で働いており、2005年ごろに保見団地に住み始めた。現在はトヨタ系の工場に勤務している。彼の店は味もいいこともあり祭りごとに行列が絶えない。彼に出店することに聞いてみると、自分の店に多くの人、ブラジル人住民だけではなく日本人住民が並んで待っていて、自分の料理を食べて喜んでいることを見るのが嬉しいと語った。そこには売り上げによる収入が増えることも大きく、それが出店する動機の一つになっていることは否めない。しかしそれ以上に彼が出店を希望するのは、自分たちの食文化が、ブラジル人住民にだけではなく日本人住民にも理解されそれが認められる機会に祭りがなっているからである。つまり祭りは普段は日本社会の中で認められる事が少ないブラジル文化を、日本人住民側によって承認される機会であると捉えていることがわかる。

ブラジル人住民にとって祭りは普段合わないブラジル人住民及び日本人住民と出会う機会にもなっていた。祭りに参加しているブラジル人住民たちの活動を見ていると、多くの場合はブラジル人住民同士で集まり会話し交流していた。そういう際にはポルトガル語を使用している。しかし彼らの関係はブラジル人住民同士の間でのみ終わるのではなかった。保見団地に長期間住んでいるブラジル人住民の中には日本人住民に友人を持つ者もいる。例えば自分の子供たちの小学校や中学校の時の同級生である「ママ友」になっていたり、自治会の役員等による自治会の活動を介して知り合うようになった人たちもいる。またかつて職場を同じくしていた人などもそこに含まれている。彼らはそれまでブラジル人住民と話をしているときはポルトガル語で話していても、日本人住民の友人と出会うと言語を日本語にスイッチし、挨拶や会話を行っていた。

このような出会いの場としての祭りの状況を一人のブラジル人住民の例から見ていこう。「ほみにおいでん」のスタッフでもあるB氏は、夫や子供たちと1990年代に日本に初来日して2006年に保見団地で生活を始めた。

彼女は日本語で普通に会話をすることができ、子供たちも保見団地の公立学校に通っていたこともあり、「ママ友」も多く、また豊田市内の工場で勤務しておりそこの友人関係もある。彼女が2019年の「ほみにおいでん」の際の友人との出会いの状況を観察してみた。扱ったのは祭り内の2時間で、彼女が会話し相手とその使用言語によって分類した。すると、2時間の間にブラジル人住民とは14名と話しており、そこには夫の友人や「ママ友」などがいた。それに対し、彼女が日本語を使って話していたのは6人であり、ここには自治会などの地区の活動を通して、または子供を介した「ママ友」が含まれていた。

このように、2019年現在ではブラジル人住民と日本人住民の間には、1997年の状況と比べて変化が生じていることを確認できる。ブラジル人住民と日本人住民の間には友人関係がより広くみられるようになっており、97年のアンケート時に見られた内向きなセグレーションを催すような状態からの変化を指摘することができる。

### 新たなカテゴリーの生成

保見団地に住む住民間の関係を見ていくと、分離から連携へと向かっている過程を論じてきた。しかし、それと同時にこのような連携に当てはまらない人も住民の中には存在している。

すでに見た表1からもわかるように、2008年以降はリーマンショックの影響もありブラジル人住民は減少していた。しかし、日本の経済が回復し雇用が増えていったことを踏まえて、さらにブラジルにおける政治経済状況もあって、2016年以降保見団地に住むブラジル人住民が増加するようになってきている。特に2015年から2019年を比べると800人以上が増加している。さらに、2019年からは、入管法が改定され特定技能による外国籍住民が増えるということから、日本人住民の中には、団地の中にもまた急激に外国籍住民が増えるのではないかという恐れを抱く日本人住民がい

た。

さらに、この2、3年の間で新たなブラジル人住民が増えてゴミ出しルールや夜中までの騒音などの問題が再燃するのではないかという恐れがある。このような不安は日本人住民だけではなく、保見団地に住んで長いブラジル人住民にもみられた。例えば先ほど紹介したB氏も自分の居住地区のゴミ収集場所のマナーを破る人が出てきており、それが新たに入ってきたブラジル人住民なのではないかと疑い、それによってまたブラジル人住民が批判される対象になることを恐れていた。

日本人住民側には、団地の中での「外国人」に対して反感を抱きいわば排除の意識を持っている人もいる。その存在を伺えるのは、例えば「ほみにおいでん」への苦情からみてとれる。「ほみにおいでん」は、開始当初は路上で行っていたが3回目からは団地内のグラウンドで行うようになった。この公園はその周辺に一軒家が立ち、また道路を挟んでURの団地が立っている。祭りを開催するにあたって、事前に近所の住民には祭り実施の際に騒音で迷惑をかけることがあることを知らせる通知を出しており、そこには21時まで祭りを終えることを告げている。これまでの開催の時に21時になっても屋台の明かりをつけ続ける店があったり、祭りの参加者、特に若者たちが、祭りが終わり解散することをアナウンスしても集まり続け、その声がうるさいという苦情が来ることがあった。しかし、地区の夏祭りも同じグラウンドで行っており、「ほみにおいでん」と同様に21時までと通知しているが、同じように21時をすぎても騒いでいる場合もある。しかし、夏祭りの際に苦情というのはほとんど聞かれないという。つまり同じような騒音があったとしても、地域の「伝統」的な祭りに対しては寛大であったとしても、「多文化的な」「ほみにおいでん」に対しては厳しい対応を取る場合があるのだろう。



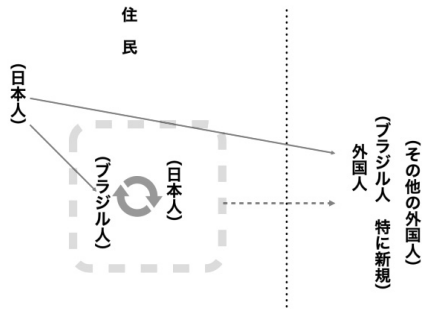
おわりに

これまで保見団地におけるブラジル人住民と日本人住民との「つながり」の変容を、同地域で行われてきたフェスティバルの変容から明らかにしてきた。1990年代始めのブラジル人住民受け入れの初期においては、日本での生活に適応していないことから日本人住民との間で衝突が生じた。また、両者における共通言語がないため、お互いにコミュニケーションができず、またブラジル人住民側も積極的に日本人住民と関わろうという意識が低かった。そこで、日本人住民側が交流を企画したフェスティバルに対して「ゲスト」として参加し、ブラジルの文化実践を提示するにとどまっていた。

その後、ブラジル人住民の定住化が進み、日本人住民との関係が成立するようになっていった。そのようなつながりが成立して初めて、「国際フェスタ」や「ほみにおいでん」のようなフェスティバルが可能になったと言える。特にA氏とM氏のようなブラジル人住民と日本人住民との間での協働がないと、場所や機材の賃貸や保健所の許可、さらにブラジル人住民及びその他の外国籍住民を集めることは難しいだろう。その意味でも、「国際フェスタ」にしる「ほみにおいでん」にしる、出身地を超えた協働の成果であり、またこのようなフェスティバルの機会が出身地を超えた繋がりを再確認する機会ともなっていた。

またブラジル人住民も自治会の活動に関わるものが増えてきている。その表れとして夏祭りなどの各地区で開催されているフェスティバルに対して、ただの客として参加するだけでなく、運営する形で参加している者が現れていることからわかる。このようなブラジル人住民が自治会などの地域活動に参加するようになっていることは、周辺の参加としてレイブとヴェンガーが論じているように、ブラジル人住民が地域社会の協働作業に少しずつ関わっていくことでそのメンバーの一員とみなされていく、自分の居場所を形成していくプロセスとも考えることができる（レイブ、ヴェ

図1 2018年における保見団地内での日本人住民とブラジル人住民の関係概念図



ンガー 1993)。

しかし、このようなつながりが、団地全体に覆われているのではない。現在の保見団地で見られる関係を図1として表示しよう。新たな外国籍住民が増加し、多国籍化するとともに、ブラジル人住民の中でも新たに保見団地で生活するものが増えてきている。また2019年の入管法改正に伴い、団地住民の中では新たなブラジル人住民が増えることを懸念しているものがある。彼らの中では、新たな「外国人」カテゴリーを生成し彼らを排除しようと考えている。また日本人住民の中では、新規外国籍住民だけではなく、これまで保見団地に住んでいたものを「外国人」として嫌悪感を抱いている。

このような現実の中で、今後の多文化共生に求められることを考えると、即効性のある解決案はないだろう。時間をかけながら、また様々な機会を意識的に作ることで、日本人住民とブラジル人住民とが出会い、コミュニケーションをとることができる地域における協働の機会の提供なのではないだろうか。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K01234（多文化都市におけるイベントに関する文化人類学的研究）の研究成果の一部である。

## 注

- 1 ここでは保見地区は保見中学校区をさす。
- 2 特にベトナムの技能実習生が1部屋に複数人が集まって暮らしているような例が見られる。
- 3 「ゴミ問題」に関しては渋谷 2020 を参照。
- 4 団地住民に聞いても、この団体に関する情報は得られなかった。おそらく団体としては、活動はしていないだろう。
- 5 質問紙調査の詳細な結果に関しては丹辺他 2020 を参照。
- 6 2018年8月11日、M氏へのインタビュー。
- 7 2018年6月23日、T氏へのインタビュー。

## 参考文献

- Frost, Nicola 2016 *Anthropology and Festivals: Festival Ecologies*, *Ethnos*, 81-4, p569-583.
- Getz, Donald 2010 *The nature and scope of festival studies*, *International Journal of Event Management Research*, 5-1, p1-47.
- 有末賢 1999 『現代大都市の重層的構造』 ミネルヴァ書房。
- 飯田剛史 2001 『在日コリアンの宗教と祭り：民族と宗教の社会学』、世界思想社。
- 梶田孝道、樋口直人、丹野清人 2005 『顔の見えない定住化』、名古屋大学出版会。
- 渋谷努 2020 「多文化共生のまちづくりとイベント・祭りのマイクロコスモス『ほみにおいでん』を中心に」『変貌する豊田』（丹辺他編）、東信堂、220-241。
- 戴エイカ 2006 「フェスティバルと多文化共生」『都市空間を想像する』（端信之ほか編）日本経済評論社、132-155。
- 都築くるみ 1993 「日系ブラジル人受け入れと地域の変容」『名古屋大学社会学論集』第14号、107-159。
- 都築くるみ 1995 「地方産業都市とエスニシティ」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房、235-281。
- 豊田市国際交流協会他 1997 『保見団地における共生の地域作りのための住民アンケート調査報告』

名古屋大学社会学研究室 2016 『外国人集住地区のコミュニティ形成と国際化 保見団地の現在』名古屋大学社会学研究室社会調査報告書 15。

丹辺宣彦他 2020 『変貌する豊田』、東信堂。

松平誠 1990 『都市祝祭の社会学』、有斐閣。

レイブ、ジーン・ウエンガー、エティエンヌ 1993 『状況に埋め込まれた学習』(佐伯胖訳) 産業図書。

和崎春日 1996 『大文字の年人類学的研究』、刀水書房。